

杉本苑子

鳥影の関
〈下〉



杉本苑子

鳥影の関
〈下〉

鳥影の関とりかげ せき

下

定価 一、二〇〇円

著者——杉本苑子すぎもとそのこ

編集人——守屋健郎

発行人——加藤祥二

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

大阪市北区野崎町八の一〇

北九州市小倉北区明和町一の一

〒一〇〇

〒五三〇

〒八〇二

印刷所——

株式会社精興社
凸版印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——昭和五十七年十二月二十一日

0093-703430-8715

© 1982, Sonoko Sugimoto

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

鳥影の関 下 目次

つゆくさ 7

報徳仕法 53

にしごりさん

104

密告 148

風花

199

呼び声

246

解説

神谷次郎

321

装画・装幀
粟屋
充

鳥影の関下

つゆくさ

関所の番卒たちは、小静の声を聞きつけるとすぐ、通用門をあけてくれた。

「刻限はずれに参上し、申しわけありません」

挨拶して、ひとまず番所へ入ったが、水死人の件は、すでに川添番頭はじめ関役人一同の耳に達していたとみえて、

「ごくろうさま」

と、くちぐちに彼女はねぎらわれた。

黄麻の、涼しげな帷子にくつろいで、川添外記は夕餉をしたためていたらしい。竜岡目付も同様、単衣の着流しで自室から現れた。謹直な袴姿しか見ていない小静の目に、上司らの普段着は珍らしく、ことに竜岡要之助のそれには、ふと、目のやりばに窮するようなたじろぎすら覚えた。

（お城下のご自宅でも、うちとけた、このようななりでおられる竜岡さまか）

頭をかすめた想像に小静は羞恥し、どぎまぎ目を伏せた。

「お山詣ではいかがであったな？ 一ツとき、まっ黒な雷雲が湧き起こって、ここらも白州の砂利が浮き上るほどのどしゃ降りとなったが……」

「休みをとらせて頂き、ありがとうございます。おかげで参詣できました」

老番頭に小静は礼を述べ、ごく、かいつまんで山での夕立の激しさ、妻さを語り分けた。

「なんじゃ、錫杖に落雷したと？」

「興福院の雲水さんが一人、講中に混じって登山したので……」

「あぶないことであつたなあ。その僧に怪我はなかったか？」

「遠くへ投げたせつな、落ちましたので、なにごともなくすみしました」

「ちょうど同じころ、芦ノ湖では水死体が浮かんた」

と、脇から竜岡目付が口をはさんだ。

「それがいささか胡乱な武家だな。小静どのもすでお聞き及びであろうが、身分素性を証するものを何ひとつ所持しておらぬのだ」

「うけたまわりました。ただ一通、亡夫民部の名を記した所書だけが、持ち荷の中から出てきたとか……」

「心当りは？」

「いまのところ、皆目ございませぬ」

「遺骸と対面いたせば、どこ何びとか、わかるであろうか」

「たぶん、見当はつくはずでございます」

「われらもさように存じたゆえ、たまたま来合せていた権現社の常使に命じ、元箱根の宿老どもに事の顛末を知らせかたがた、小静どのを呼びにやらせたわけだ。ご足労だが、では一応、ご検分ねがおう」

「かしこまりました」

出て行きかける背について、

「おれたちが案内します」

急いで立ったのは、江見恭二郎、峰岸主馬の両番士だった。

外へ出てみると、あたりはすっかり暮れていた。

夜の関所は、扉を閉ざした大門がくろくろと東西にそそり立ち、番所の小窓からわずかに灯が洩れるばかりで、中央の通路はことに暗い。

江戸口の向こうは『つかもと』など、掛け茶屋が四、五軒あるきりだし、新屋と呼ばれるその聚落をすぎると、あとは元箱根まで杉並木の街道がつづくだけだから、茶屋が店をとじ、藪簀を巻いてしまえば、門の外は墨汁を流したような闇だった。

そこへゆくと上方口の方角は、千人溜まりの空地をへだててなお、箱根宿の灯の色が、門扉の背後にぼうっと照り映えて見えるほど明るい。

絃歌のさんざめきまで、かすかに聞こえた。不夜城などと呼んでは少しもおおげさかもしれないが、元箱根側が、はやくも寝しずまりでもしたような淋しさの底に、じっとり沈んでいるのに較べると、同じ時刻、箱根宿はこれからが、賑わいの汐先でもあるかのような浮き立ちかただった。

「西門を出るときのために、わたくし、これを持参しました」

帯のあいだから、小静は焼印札を抜き出して、

「どなたにお改めいただければよいのでしょうか」

と江見恭二郎に見せた。

「そんなもの、持ってこなくてもいいのに……」

「でも、定番人さんがたの妻子でさえ、関所を通るのには手形がいりますわ」

「われわれは関役人ですよ。まして、水死人の検分はなにか、公用じゃありませんか。どちらの御門を通ろうと自由です」

「せめて、では、門番さんに札をお見せしましょう」

「いつも、そんな律儀りぎぎなことをしているんですか？」

「いつもって……わたくしまだ、箱根宿へ一度もまいったことはありませんわ」

「えッ」

「お関所の西側へ出るのが、そもそも生まれてはじめてなんです」

「おどろいたなあ。その札を使って、ちよくちよく買物などに出かけているのかと思った。元箱根よりもはるかに箱根宿のほうが、店屋も品かずも揃そろっていますからね」

「自分の用たしなどに使うのは、なんとなくためらわれたものですから……」

「遠慮ぶかいんだなあ。こいつは下戸げこなので誘さそいませんがね」

と峰岸主馬を指さして、江見は笑った。

「拙者や早瀬、森下などは、ちよっとでも懷中にゆとりが生じると、小田原町、三島町へ飲みに出ますよ」
このまに門番の足輕が鍵を鳴らして、上方口の通用門を引きあげた。

「まあ、きれい」

眼前に展ひらけた夜景の眩くらしさに、小静はつい知らず、歎声をあげてしまった。

星のきらめきが、頭上ちかぢかと迫せまって見えるほど闇の拡がりの濃い関所の内側……。そこに立って見渡すと、箱根宿の遠望は別世界のようだった。

手たぐり寄せられるように小静は門を出た。

「どうです、にぎやかでしょう」

と江見恭二郎がつづき、峰岸主馬が最後に通用門をくぐった。

もともと無口ではあるけれど、峰岸はさっきから一言も喋らない。屈託くたくありげに眉を寄せている。その

くせ小静が水死人の面態（めんたい）を見とどけにゆくときまったとたん、江見一人でもよいはずの案内役を進んで買って出たのも、目立ちたがらない日ごろにしてはどことなく異様であった。

西門の先も千人溜まりになっていて、柵（さく）囲いのはずれに噴き井戸が造られていた。山から流れ出る清水を引き溜めて旅人の飲料に供したもので、切り石をたたんだ井桁（いば）の体裁は東門のそれとほとんど交らない。余水（よすい）は道をつち切って湖水にそそぎ、やはりここにも石橋がかかっている。

宿場町はこの橋のきわからはじまってい、つぎの石橋の手前に高札場（こさば）と、時の鐘を吊した鐘楼があった。「暗さに馴れた目が、とまどうほど明るうございますね。この町なら居酒屋や小料理屋などもたくさんあるでしょう」

「もっとも飲みに出るといったって、われわれの小遣です。めったに酒と対面するおりなどないけど、そろ歩きするだけでも退屈（たいくつ）しのににはなりますよ。関所でへボ将基（しょうき）にひまをつぶすよりはね」

ただし、番頭（ばんとう）や目付（めづ）は番士らの夜歩きを好まない。

韭山（ひらやま）の代官所は、支配地の三島町に出張り役所を設け、常時、手代を詰めさせているが、小田原町を支配する小田原藩は、その業務を箱根関所に在勤する藩士らに肩代りさせていた。

関役人としての仕事のほかに、つまり彼らは箱根宿（ひらね）小田原町の行政管理までを兼任させられているのである。

「安酒をくらって乱れなどしては、取締官として町民への示しがつかぬ。支払いは、たとえわずかでもそのつど済ませろ。借りをつくってはならぬし、たかり、おごりの強要などもつてのほか。できれば店も、管轄（くわんか）ちがいの三島町へ行け」

と、川添番頭など、ひどく口やかましい。

たまの保養に、彼らがわざわざ芦ノ湯まで遠出するのも、湯治（とうじ）が目的であるのはもちろんだが、つねづ

ね番士や足輕たちに、

「なるべくならば、近くで羽目をはずすな」

と言っけかせていることへの、実証の意味もあるのであった。

水死した武士の遺体は、境枕のきわにひとまず引きあげられているという。

「その前に三島町の問屋場へ寄って、遺品を見てはどうですか」

江見恭二郎の言葉に、小静は無言でうなずいた。

はじめて目にする箱根宿の灯の色に一瞬、年甲斐もなく浮き立った気持が、江見のひとことで、いきなり現実にも引きもどされたのだ。

峰岸主馬は、あいかわらず重くるしい表情のまま五、六歩あとから黙りこくってついてくる。

問屋場には名主、年寄、勘定役ら主だった宿役人のほとんどが詰めていて、

「お役目、ご大儀にぞんじます」

いっせいに会釈した。

「この婦人が天野小静どのだ。人見改め役として現在、箱根お關所に勤務しておられる」

と江見が引き合わせる。

「かねがね同役の石川お徳どのからお噂を聞かされております」

挨拶する宿役人の中に若い帳付がまじっていて、本陣石川家の、当主の倅だとみずから名乗った。

「祖母がいつもお世話さまになっています。並はずれて多弁な婆さま……。お關所でもさぞかし、おやかましようございましょう」

苦笑まじりに頭をかく。幾人もいるとか聞いていた石川お徳の、孫の一人にちがいない。

「とんでもない、こちらこそ大先輩のお徳さまに日ごろ何かとお教えいただき、おかげでどうやらお役を

勤めております」

若者に辞儀を返しながら、小静は土間をよこぎって上り框に近づいた。帳場囲いの格子越しに、机や書類類などが見える薄縁敷きの座敷である。

隅に置かれた品々をさししめして、

「ごらんくださいまし」

名主とみえる老人が説明した。

「女こどもや足弱な年寄りなどが用いる結わえつけの福草履……。ごらんの通りだいぶ傷んでおりますが、これが三島町の入江の岸にきちんと揃えてぬいであつたのでございます」

「では、覚悟の入水と見てよろしいのですね」

「履物の形からすると、そうなります。なお、その上に、近くの芦の茂みの間から持ち荷とおぼしい布包みが出てまいりました」

「ところどころ破れた青漆引きの道中合羽、籐編みの空の弁当行季、着替え二、三点、継ぎの当った足袋など、どれもひどく貧しげな、古びた品ばかりである。」

小静に、見おぼえなどあろうはずはなかったが、たった一つ弁当包みの中から出てきたという所書だけが、何としても奇怪だった。

「相州足柄下郡、元箱根、権現門前町、天野民部」

と克明な楷書で記されている。くい入るようにその文字へ目を当てた小静は、

「いかがかな？ 所書の筆蹟、持ち物などに、お心当りはありますか？」

「いいえ」

きっぱり言い切った。

「ごさいませぬ」

嘘ではない。よしんば水死した旅の武士が天野民部をつけ狙っていた相手であったにせよ、遺留品はごく、ありふれたものばかりだし、まして筆蹟からの身許の割り出しなど、小静に出来るわけはなかった。

「さようか」

さして期待してはいなかったらしい。三島町の町役らはあっさり、うなずくと、

「では、ご面倒ながら遺体をご検分ねがいますうかな」

先に立って問屋場を出た。

「こちらでござる」

提灯のあかりにみちびかれるまま小静がおり立ったのは、街道すじから横路地づたいに折れて、ゆるい傾斜をだらだらと四、五十間ほどくだった芦ノ湖の岸である。

入江がかたちづくられ、いちめんに生い茂った芦原のところどころに猫の額ほどの水田が拓かれている。自家用に使うほんのわずかな米を、生業の片手間に收穫するつもりで、附近の町民がこつこつ作りあげた田んぼであろう。素人じみた不器用さでくねくねと曲りながら、それでも稲が植えられ、やや遅めの開花期を迎えかけているのが、水明かりの反射でぼんやり見える。

ふだんはこのあたり、夜など人が立ち入ることはほとんどない淋しい水辺にちがいない。今日はしかし、提灯や松明の火が幾つも揺れていた。水死体を囲んで、ヤジ馬が集まっているのだらう。

江見恭二郎が前に立ち、護衛でもする身構えで峰岸主馬が小静のわきに付き添いながら水ぎわへ近づいて行くと、

「きたきた」